

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

## 餓鬼岳・夏山準備合宿

北信越大会も終了し、大町岳陽高校では新体制が発足。2年生がリードして、7月の初旬、文化祭の展示を行った。8日には、恒例の鍬の峰登山道整備を行う予定だったが、悪天候により中止。7月15日、16日の夏山準備合宿が、新体制発足後初の山行になった。

今年の準備合宿は、餓鬼岳で行うことになった。餓鬼は去年日帰りで計画したものの雨天中止、毎日岳陽高校から眺めている山でありながら、山岳部としてはここ5年訪れる機会がないまま残されていた。北アルプスの中では訪れる人も少なく、静かな山行が楽しめる山として、僕個人としては餓鬼岳は好きな山の一つである。生徒を連れていくにはテン場の狭さが気になる場所であった。夏山準備合宿は、ここ数年海の日前後に計画せざるを得ず、その込み具合から縦走路の渋滞や、テン場の混雑に頭を悩ます。去年の針ノ木でも小屋主の百瀬さんに無理を言って、なんとかテントを張らせてもらったが、今年の餓鬼岳でも小屋主の伊東さんが大町岳陽の山岳部ならなんとかしましょうと無理を聞いてくださり、テン場はもちろんいろいろな面で便宜をはかってくださったのは、ありがたかった。岳陽山岳部が地元の人に大切に思われているというのは、単に地の利というだけでなく、これまで大町、大町北の両校の山岳部が大町市民に様々な形で貢献してきたことがあったからだ嬉しく思う。

さて、山行は1年生5名、2年生4名（内女子1名）に3年生のインターハイ組3名の12名が参加。朝7時50分に登山口を出発。前日から高気圧が張り出し、異様な高温が続き、各地で猛暑日となり、松本で予想気温37度という予報が出される中、朝から異常な高温状態でのスタートである。白沢をスタート、新部長がトップでペースを作っていく。まずまずのペースである。しかし、とにかく暑い。一本目の休憩をおえ、しばらく歩いたところで、1年生の一人が吐き気を訴える。最終水場で少し長めの休憩をとり、回復を待つ。

何とか行けそうだということで、大風山を目指す。後ろからジリジリと照らされ、風もない。この登りが強烈だった。二人の生徒が足を攣り、一人の生徒が頭痛を訴える。いずれも高温によるエネルギーと水分、さらには塩分、糖分の不足が原因だろうと考え



られる。かなり危険な状態だったかもしれない。途中の休憩で、強制的に塩分、水分、糖分、エネルギーを補給するように指示。なんとか対応が遅れないように配慮した。これだけの暑さは久しぶりのことである。大風山に到着しても、目指す餓鬼は遠い。最後の百曲がりをだましだまし登り、餓鬼岳小屋に着いたのは、14:50、7時間のアルバイトであった。

空きスペースにテントをなんとか張

る。そして山頂へ。眺望はいうことなし。西に裏銀の山、北西に剣・立山、南に槍穂の峰々、北にはピラミダルな針ノ木と鹿島槍の双耳峰が自己主張している。八ヶ岳も南も中央もそして富士山まで、惜しげもなくその姿をさらしていた。

夕食はキムチ丼。心配された夕立や雷もなく、見事な夕焼け。三日月と宵の明星が西の空に瞬きだすと、眼下の安曇野にもポツリポツリと灯がとり始めた。暑さも少しずつ和らぎ始めた。疲れと心地よい酔いが眠りを誘うが、不整地の幕営でゆっくりとは眠れぬまま一夜を過ごした。



翌朝は2時半起床。やはりこの高所、少し肌寒い。ラーメンを食べて、予定時刻をやや過ぎた4:05に出発。下山日ではあるが、今日のコースも決して楽ではない。朝はまだ身体が寝ているので、まずは目の前にある岩峰群ケンズリを慎重に越えていく。先行した2人組と相前後しながら、東沢乗越を目指す。今年の夏合宿は裏銀座と雲の平という予定である。その裏銀の山々を終始見ながらの快適な稜線散歩。表銀座やパノラマ銀座のような一級国道とは言い難いが、しかし、要所には安全配慮がしてあり、むしろ味わいがある。東沢までは4時間弱。せっかくだからと、東沢岳の頂上も踏んだ。小屋主の伊東さんの話では、東沢からの下りはまだ草刈りをしていないので、気を付けて

下ってくださいとのことだった。確かに乗越からしばらくは草丈も高かったが、まあ織り込み済みのこと。渡渉や藪漕ぎは、適度なアドベンチャーを楽しむ余裕があれば、こんな楽しいことはない。しかし、好事魔多し。およそ半分ほど沢を下って、堰堤を高巻して、ちょっとした斜面をへつっているときだった。安全のためのロープが張られていたのだが、先頭が通過し、2番目が渡り終えたあと、3番目の生徒がロープに体重をかけ、岩に手をかけた瞬間、もろい柱状の花崗岩が剥離した。間一髪逃れたが、ヒヤリとした瞬間であった。こういった場所の通過については、最も注意しなければならないが、やや注意力が欠けていたと甚く反省。山では何があるかわからない。

下山にはおよそ4時間弱。12時少し前に中迫温泉に到着。温泉に入れる！とそれを楽しみにしてきた生徒たちだったが、予想外に時間がかかり、12時35分発のバスに乗るには風呂に入っている余裕がない。次のバスは3時。温泉を取るか、即行で帰るか、生徒には随意に選ばせた。顧問も含む15人中、11人が即帰宅組。4人がまったり温泉組と別れた。

しかし、この日も暑い一日だった。毎年夏山準備合宿は梅雨時に行くことになるケースが多いので、勢い雨に降られることが多い。それも一つの洗礼と受け止めてきたが、今年ばかりは、いつもとは勝手が違った。終了後のミーティングの中では、3年のインハイ組から、3年間の中でもかなり厳しい部類の合宿だったという感想も聞かれた。一年生にとっては、フル装備での2日間が次への大きなステップとなったはずである。3年の姿を追ってきた、2年生には自分たちが山岳部を背負っていくという気概を持つことができたことだろう。